



空 間

国際日本文化研究センター - 助教授 森 洋 久

アシモ君はなぜ歩くのか。聞くところによると、生まれるべきか否か、彼の産みの親はローマ法王にお伺いを立てたそうだ。「被造物なる人間が造るものは神はお認めくださるだろう」という回答であった。こうして彼の歩く姿を見ることができるようになったのである。古くから、人間を特徴づける要素としてその知能が挙げられる。にもかかわらず、人工知能を開発するにあたってローマ法王にお伺いをたてた、という話は聞いたことがない。「歩く」ということがなぜ、宗教的な意味を持ちえたのだろうか。

創世記第一章二十七節には、「神は御自分にかたどって人を創造された。」と書いてある。その「人」にかたどられたロボットを造るということは、神に近づいたロボットということになる。これが神の御意志に抵触するか否か、それが問題だ。

いや、こんなSF話を聞いたことがある。世界中のコンピュータ科学者、人工知能学者が総力を結集し、世界最強の人工知能マシンを開発した。このマシンは、人類が解けなかったありとあらゆる問題を解くシステムとして世界中が注目した。



さて、このマシンが完成し、衛星実況生中継の中、人類の最終命題が入力された。「神は存在するか。」マシンは、今までのコンピュータの何億倍ものスピードで計算を遂行し答えを返してきた。「今こそ神は存在せり！」

十九世紀の後半、人は飛ぶことを覚えた。初めて空を飛ぶときの感覚と、初めてアシモ君が歩く姿を見たときの感覚は、同じではないかと思う。少なくとも私にとっては一緒であった。あるいは、大地を疾走する蒸気機関車、現代で言えば、リニアモーターカー試乗会。それらは単なる移動することの追求ではなく、空間の制覇の追求とっていいだろう。アフリカの森の

動物であった人間が二足歩行で平原へと歩み出すときからその歴史は始まった。アシモ君が一步を踏み出す姿は、アフリカの記憶そのものなのかもしれない。



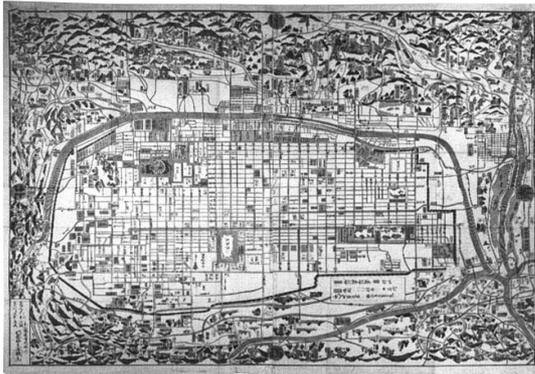
人工知能は、アイテムのネットワークで構成される。外界の何らかのオブジェクトと対応付けられた一つ一つのアイテムの関係をコンピュータ上で記述し、その関係の演算を行うことによって、文章を理解し、知識を増やしていく。World Wide Web (WWW) の発明者、リチャード・バーナース・リーはこの考え方をインターネット上で発展させることを提案した。XML(eXtended Markup Language) という機械可読なフォーマットで記述されたアイテムを相互に結びつけ、地球規模の一つの人工知能を作り上げようというネットワーク・オートマタの概念だ。リーにしてみれば、現在のWWWは胎内の胎児である。いま、人間というウイルスによって、サーバという核に、情報という遺伝子がどんどん蓄積されていく。ある時そのDNAの量が限界値を超えると、地球規模人工知能体は静かに作動を開始する。

希望と楽園を求めて人は歩き出したが、実は

その先にはスフィンクスの謎が横たわっていた。「歩く」という行為は人間の歴史そのものなのだ。一昨年の秋、一八七三年に開催されたウィーン万国博覧会を調査するためにウィーンに赴いた。リング通りを建設し、これに沿って、市庁舎、自然史博物館、オペラハウス、ランドスラッセ駅など、モニュメントとなる近代建築が次々と立てられ、近代都市へ生まれ変わろうとしていたウィーンの町で開かれた博覧会だ。当時、ヨーロッパではジャポニズムが席卷しており、日本は、数々の賞をさらい、記念品は飛ぶように売れ、大好評を得た。日本のミッションは、準備から会期が終わるまで、多くの助力を惜しまなかったオーストリアに対して、お礼と親善の意を込めて晩餐会を催した。場所は当時オープンしたばかりのインペリアル・ホテルであった。インペリアル・ホテルはウィーン学友協会の裏手にあり、現在もオーストリアの迎賓館的な役割を果たしている一流のホテルである。

この華やかな晩餐会の調査にホテルを訪れたが、期待に反して資料は一つも残っていなかった。第二次大戦が終了すると、ソ連軍はこのホテルを拠点にウィーンへ進駐した。ウィーンのソ連軍は、略奪、暴行、ありとあらゆることをして、立ち去っていった。「ホテルの宿帳などの重要な記憶をすべて持ち去ったのだ」とホテルの支配人は力を込めた。しかしながら絶望的な状況にも少しの希望もあるという。1994年の改修工事の時に、壁の中からひとかたまりの宝物が出てきたことを教えてくれた。いくつかの調度品、食器。ソ連軍に略奪されないよう、時の支配人が壁の内側に隠したのだらうという。調度品や、食器がいかに高い物で、由緒あるものかを説明してくれた。だが、私の興味は八畳くらい大きな地図であった。それはハブスブルグ家全盛の城壁国家、ウィーンである。とたんに、ソ連軍に抵抗する支配人は雄弁に語りはじめた。「ウィーンはとられまい！」

人間にとって、空間表現は自分のアイデンティティの表現である。それゆえに人は絵を描く。雄大な空間を描くターナの風景画から、目の前のマイクロコスモスを描くオランダの画家たち。光の中に人生の哀愁を描くフェルメール。描かれた空間は言葉以上に物を語る。空間とその認識、表現こそが人間の知能の原点なのだ。



竹原好兵衛 文久二年（京大附属図書館所蔵）

描かれるのは絵だけではない。京都という都市も描かれた空間と言っていだろう。三方を山に囲まれ、風水に基づく色と鐘の音が配される。両側に二本の川。この安定した空間構造の中に、当時のハイテクノロジーを駆使した幾何学都市が築かれた。視覚、聴覚ともに計算し尽くされている。風水によって都市が築かれた、と解することにはいささか無理もあるが、風水によってこの空間構造を説明しようという人の心こそ、人がこの千年都市を大地の上に描こうとしていた証拠である。

この都市を洛中洛外図として紙の上に描くときにも、注意深くこの構造が読みとられている。中心には碁盤の目という美しい幾何学構造がとられ、三方の山という表現がなされる。この都市の描き方はこれしかない。これを上と下に分割して描いた洛中洛外図も存在するが、それは便宜的なものだ。一枚の地図で表現して初めて、その均整のとれた構造が際だってくる。もし、二つに分断するのであれば、屏風にして自分の両側に配し、立体構造で見るとべき都市なのだ。

人間は空間を五感を総動員して認識してい

る。目から入ってくる情報だけではなく、耳、触覚からくる情報を頭の中の三次元空間にプロットしていく。外界から入ってくる情報はほんの一部にすぎないはずだが、頭の中では見えないところも予測し、補完することによって、全方位的な空間が構成される。さらには形の再現だけではなく、動いている物、止まっている物、音を出しているもの、ものの質感など、様々な情報がこの空間には納められている。動いている、ということも単純な情報ではない。自分に対して動いているのか、あるいは、大地に対して動いているのか、そういった情報もきちっと把握されている。こんなに大量な情報が納められているにもかかわらず、自分の注目すべきものはなにかということも瞬時に判断されている。

この自分の中に生成された空間の中に、自分も存在するということがおもしろい。自分の鼻先があり、腕があり足がある。酒を飲み過ぎた暁には、胃の中を通り抜ける食物もその空間のなかで踊っている。これが、私を取り囲むマイクロコスモスである。「歩く」ということは、止まっていたマイクロコスモスが動き始めることだ。自転車に乗ると、さらに速く、自動車、飛行機、宇宙船、マイクロコスモスの動きはどんどん激しくなる。その動きの彼方にマクロコスモスがある。これだからこそ空間表現がアイデンティティとなり得るのだ。

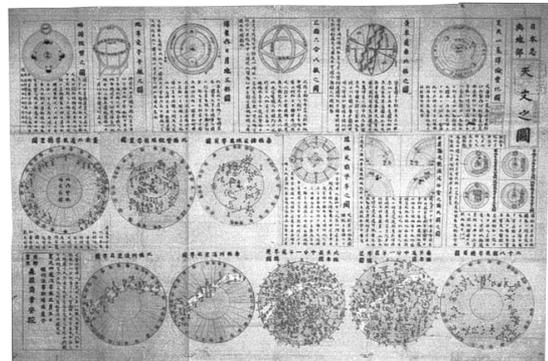
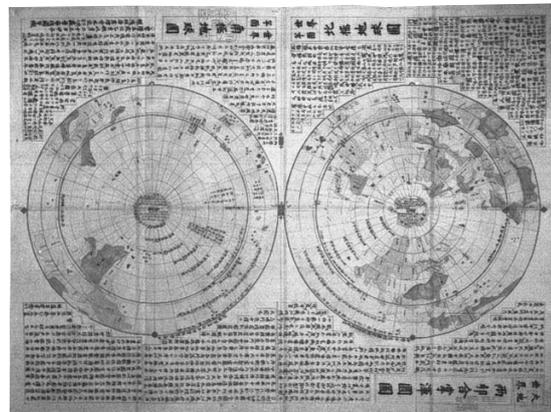
町へ繰り出し、歩いてみると、ふっと表通りから抜ける小さな構造がいっぱいある。ろうじや途子。そこの先に存在する社や中庭。井戸から冥界に抜けることもある。空間がそこにひとりであるのではなく、人間の持つ空間認識構造によってその場所に描かれた空間たちである。これらのフラクタル・マイクロコスモスが組み合わさり、碁盤の目という法則性を持ち始める。これがさらに拡大し洛中洛外というマクロコスモスへと発展していく。

人工知能の空間認識理論は、空間を分割し、カテゴライズし、アイテム化する。このアイテ

ム化された記号の相互関係を解析することによって、空間を認識しようと試みる。だが、京都の町や洛中洛外図を描くというプロセスはそれでは理解できない。そもそも、認識対象と認識主体の分離ができるかどうか分からない。主体の思考の中にあるものの相互関係を大地と洛中洛外図という空間の中に刻んでいく、記号の空間化のプロセスなのだ。おそらく他の人間の空間認識も似たような物なのではないだろうか。

おそらく、リーのネットワーク・オートマタの試みはそのままでは失敗するであろう。それは人間の空間認識の構造を取り入れていないからである。そもそも、リーの考えだしたWWWなるものは、情報の空間からの離脱の発想から始まった。情報アイテムのネットワーク構造は空間とは無関係である。東京の情報がニューヨークにあっても良い。また、ニューヨークの情報が東京にあっても良い。東京やニューヨークの情報を引き出すときに、どこにあっても瞬時に出てきてほしいわけだ。こうして、WWWは生まれた。ネットワークは、地球を限りなく7.5分の1秒の大きさに近づける。近いも遠いもない。すべての情報はニュートラルな距離にある。これはこれで便利であるが、空間から離脱した情報はどんどんエントロピーを増大させている。

十八世紀の初頭、京都、京極高辻に森幸安という人物がいた。なにをやっていた人かはよくわかっていないが、この人物が、真っ向からリーとは反対の方法で地球を構成していった。彼はまず「歩く」ことから始めた。自分の家から出発し、京都の町をつぶさに見て回る。人々に聞き、文献を集め、それらを詳しく地図に描いていく。井戸の位置、社の位置まで、細かく描かれた洛中洛外図が出来上がった。さらには昔の町を考証し、いろいろな時代の地図を残している。



森 謹齋幸安の書いた地図

(国立公文書館所蔵)

- (上) 城地 天文京師地図 寛延三年
- (中) 大地世界 兩卵合掌渾圓圖 宝暦五年
- (下) 天文之図 寛延四年

彼の「歩く」はさらに発展し、大坂などの周辺の町にまで及んでいく。「歩く」では手に負えなくなり、日本中を歩いている人々、また、地図を収集している人々にコンタクトし、日本全国の地図を作成する。さらには、長崎に来る外国人の情報をあつめ、韓国、中国、さらには世界地図まで模写している。そして、彼の終着点は天球図である。彼の残した地図は五百枚近くにおよぶ。これらを連続的に連ね、彼はそのスケールを縦横自在に行き来することを望んでいた。ここに一つの宇宙が形成されている。

コンピュータの歴史を記述するとき、よく計算機の歴史として記述する。しかし、現代のコンピュータにおける計算という要素は部品にしかすぎず、むしろコミュニケーションの要素が強い。あるいはもう少し拡大し、メディア技術と言っていいだろう。そう考えると、コンピュータのご先祖は、テレビ、ラジオ、あるいは、映画、さらにさかのぼると、蓄音機やベルの伝話器、さしては、スピーキング・チューブ、といった一連のコミュニケーション・ツールである。こういったコミュニケーション・ツールが計算という要素を取り込み、コンピュータ、携帯、PDAと発展していく。動力革命、高速移動時代に帰着する空間制覇の歴史が一方にあるとしたら、もう一方に、これらコミュニケーション技術史がある。コミュニケーション技術の目標は、空間から情報を切り離し、遠くも、近くもニュートラな情報距離にする、まさに空間離脱の技術史である。この歴史の中に、人工知能もWWWも組み込まれている。

空間離脱もおもしろい物を生み出すときがある。SETI(Search the Extra Terrestrial Intelligence)というプロジェクトはご存じでしょうか。宇宙

の彼方から飛んでくる膨大な電波を受信し、その中に宇宙人が発している人工的な電波はないかを探るプロジェクトである。現在、受信された電波を、インターネットを使い、ボランティアの家に配信し、ボランティアの家のパソコンの余っているCPUパワーによって解析し、解析結果をリターンするという方法で、スーパーコンピュータの何百倍、何千倍の計算パワーを得ている。スーパーコンピュータを維持する資金が減額されたために思いついた方法であるとか。しかし、インターネットの持つパワーというのはこういうところに現れる。

さて、この空間離脱の方法論を、森幸安の空間認識方法へ適用したらどうなるだろうか。世界中の「歩く」人が、せつせと空間情報をインターネット上にため込み、これらが自然とつながり、一つの地球になっていくシステムを作る、ということだ。森幸安はいろいろな人から情報を得たが、一人でやっている以上、自ずと限界がある。しかし、インターネットという空間離脱ツールを使えば、この仕事量の限界を超えることができるはずだ。このプロジェクトのことを私はGLOBALBASE プロジェクトと呼んでいる。<http://www.globalbase.org/> を参照されたい。このプロジェクトは、神になるような人工知能を作るようなプロジェクトではない。より、人間的な空間をインターネット上に作るプロジェクトである。

アシモ君は今後、どう歩いていくのだろうか。一つ、アシモ君に提案したいことがある。ローマへの巡礼・謁見の旅をしよう。その足で、跪き、合掌し、ローマ法王の手で神の祝福を頂くために。

(もり ひろひさ)

『幼学指南鈔』と類書 中国文化受容の一つのかたち

京都大学大学院文学研究科 研修員 中島貴奈

二〇〇二年三月、本図書館蔵の『幼学指南鈔』（4 - 85 ヨ1貴 粘葉装、漉返紙雲母引料紙、押界(天二地一)を施す)が重要文化財に指定された。本書は平安末期に邦人の手により編纂された類書であり、現存するのは一種の古抄本のみである。本来は三十巻に目録一巻を添えた全三十一冊であったと推測されるものの現在では目録を含む八巻は失われ、残りは諸家の分蔵するところとなっている。

そもそも本図書館蔵の二巻、巻七(人部一・二)と巻二十二(巧藝部下、方術部、火部下)は、長い間「並河家旧蔵」とされるのみでその所在の知られていなかった巻であり、興膳宏国立博物館館長(調査当時文学部教授)・木津祐子助教授(文学部中国語学中国文学研究室)が一九九三年度の学内特定研究の一環として行われた「京都大学附属図書館所蔵貴重漢籍抄本調査」作業のなかで見出されたものである。当時は虫損がひどくあまりかえりみられていない状態であったが、阿部隆一氏による、その価値を伝えるメモが挟まれていたことから注目され、故宫博物院や大東急記念文庫蔵本の影印本との比較などを経て確認されるに至ったという。本書は既に図書館ホームページの電子化画像によってその全体を見ることが可能であるが、この十一月「中国文化の受容」というテーマで開催される図書館の展示会に出品される予定であり、実物を目にすることができそうである。

多くの書籍から語彙や成句等を抄出し、それらをさらに類別・分別して一覧化を図ることで利用者の検索・省覧の便を第一に考えて編纂された「類書」は、漢籍受容に際しての簡便かつ実用的な書である。日本においても早く『日本

国見在書目録(九世紀後半成立)に『藝文類聚』や『初学記』をはじめいくつかの中国の類書名が見られるほか、それらの類書を通しての漢籍受容の形跡が『万葉集』などにすでに認められることから、中国文化受容に際して類書が重要な役割を果たしていたことは明らかである。一方ではまた、「和製類書」という呼称のある邦人撰の類書も早くから作られていた。『幼学指南鈔』に先立つものとしては天長八年(八三一)に滋野貞主らによって奉勅撰述された『秘府略』があり、現存するのは巻第八六四(お茶の水図書館成篋堂文庫蔵)と巻第八六八(尊経閣文庫蔵)のわずかに二巻のみ(いずれも『続群書類従』に収録)であるが、もともとは一千巻から成る浩瀚な類書であった。なお中国にも大部の類書『太平御覧』(一千巻)があるが、『秘府略』に約百五十年ほど後れた、宋代の編纂である。しかしながら『秘府略』も『太平御覧』と同様に、選者が直接多くの書物を渉猟して選定、編纂したわけではなく、多くは先行する類書類(前掲の『初学記』『藝文類聚』等)からの、さらなる引用であったと考えられている。

『幼学指南鈔』は、現在故宫博物院蔵の巻十七の途中に「久安三年二月一日 大江時房」という墨書があること、また各冊末に所蔵者であったとおぼしき「覚瑜」の墨書が見られ、覚瑜の活動時期が承元四年(一二一〇)頃と推定されることから、その成立時期は平安末期であろうと比定されている。また前述のごとくその一部を佚してしまっているが、陽明文庫には『幼学指南鈔』古抄本の一部(巻十五、巻十八残葉)のほかに『幼学指南目録』(近世中期写、近衛家熙の筆であろうとされている)と題する

一冊が存し、目録記載の部類によって本書の原貌を窺うことができるのである。なお故宮博物院には巻十七のほか巻三、四、九、十三、十四、十八、三十（一部欠あり）を蔵するが、これらはいずれも明治十七年に楊守敬氏が彼土に持ち渡ったものであり、楊氏の『日本訪書志』にその記述が見られる。その他の所蔵は、大東急記念文庫蔵（巻二、五、十九、二十三、二十五、二十七）、東京国立博物館蔵（梅沢記念館旧蔵、巻十六）、お茶の水図書館成實堂文庫蔵（巻八、巻二十八）となっている。

『幼学指南目録』で明らかになる全体の部類・篇目が『藝文類聚』によく一致すること、また本文同士の対照などから、『幼学指南鈔』もやはり『藝文類聚』『初学記』『事類賦』といった先行の中国類書からの引用の多いことが明らかにされている。だが中には現存の書と一致しない記述も見られ、その依拠したところとしてすでに佚した別の類書の存在も考えうるのである。

また本書の成立の背景についてもなお明らかではない。しかしながら、その名の見える大江時房が日付の久安三年（一一四七）にはわずか七歳の幼少であることから、幼学書として時房に与えられたものだったのではないかという推測も示されている。類書がその性格上初学入門書としての役割を果たすであろうことは容易に想像でき、また全三十巻という分量からすれば（もちろん検索の便も考慮されてはいようが）「よむ」ことも十分可能だったであろう。

『幼学指南鈔』とほぼ同時代の成立と考えられるものに『文鳳抄』『管蠡抄』などがある。『文鳳抄』（十巻）『管蠡抄』（八巻）はいずれも菅原為長（一一五八～一二四六）の撰であり、先立つ『秘府略』や『幼学指南鈔』がすべて漢文であるのに対し、『文鳳抄』は片仮名混じりの訓読体になっている。また『幼学指南鈔』はどこかに秘蔵されていたためであろうか、古目録類にもほとんど名が見えず、実際に使われていた形跡も認められないのに対し、『管蠡抄』につい

ては、『徒然草』に見られる漢籍引用の記述には、直接は本書に基づくものがあるのではないかとする指摘がある。さらに近世に至ると『管蠡抄』は『博覧古言』と改題出版されて版を重ねており、よく利用されていたことが窺われる。

なお『文鳳抄』に関しては、本図書館貴重書庫に「文鳳抄之類歟」との外題を付す巻紙があり、真福寺本『文鳳抄』影印（勉誠社刊）の解説において川口久雄氏は、未見であるとしながらその存在に言及されているが、今回『文鳳抄』本文と照らし合わせてみたところ、全く別のものであると確認できたことを付け加えておく。

中世以降の注目すべき類書、幼学書として取り上げられるべきものは少なくないが、中国文化の受容における類書の役割といったことを考える上で興味深い例を呈しているのは、中国文化の受容層が一般にまで広まった近世以降ではないだろうか。近世に入ると清代に編纂された『淵鑑類函』のような大部の類書が流入し、また中国類書の和刻本も多く作られるようになった。一方で和製類書や幼学書は、もっぱら金言名言ばかりを集めたもの、或いは人物に関する故事を集めるもの、または説話集のような形をとるものと、細分化して数多く生みだされていった。故事や説話を集めたものを類書とみなせるかどうかについては議論があるが、例えば「忠臣」「孝行」などで部類し、その中で話のひとつひとつに標題をつける、という形だけを見れば、類書の「人」部のみを取り出して増補していったものと解することも可能であろう。

そのような、故事を集めた類書をさらに分かりやすくしたものに、説明文に絵を添えているものがある（絵入りの類書は中国に多く先例がある）。そのひとつに貞享五年（一六八八）の序をもつ『絵本宝鑑』という書があり、有名な許由の故事（堯帝が許由の人格に感じて天下を譲ろうと言ったところ、許由は汚らわしいことを聞いたとして水で耳を洗い、潁水のほとりに

隠居した)を収めるのだが、なぜか絵には岩の上から流れ落ちる「瀧」に手をかざして耳を洗おうとする許由が描かれ、和文でも「瀧川の瀧に耳をぞ洗ひける」と説明されている(写真参照)、『藝文類聚』で関連箇所を見るかぎりでは「池水に臨みて耳を洗ふ」、あるいは「清冷の水に遇ひて其の耳を洗ふ」としかなく、これだけでも「絵」という視覚的なものに置き換える際の作為が感じられておもしろいが、そのみでな

く、近世和製類書について研究をされている神谷勝広氏によれば、近松門左衛門の作品『信州川中島合戦』(享保六年、一七二一)の中には「聞たるみよのけがれを、此瀧にあらひしがふしぎ成か昔の業父許由にもあらず」と、この書の記述に拠ったとおぼしき文章が見られるという(その他数例の対応箇所が挙げられている)

以上のような例はかなり極端なものであろうが、儒学者や専門の漢詩人はひとまずおくとし



「絵本宝鑑」(京大附属図書館所蔵) 請求記号 8-44工31

て、それ以外の人々が皆直接経書や史書を目にしていたとは考えがたく、やはりそこには簡便かつ明解な「類書」という媒介が存在していたはずである。そしてそうした類書の記述は、それが漢文から漢文訓読体、和文体さらには絵解きへと形をかえて原典からはなれてゆくことによって(これらが一直線上にあるわけではないが)、僅かな違いや、あるいは曲解といったものを含みやすくなるのではないだろうか。

日本文学における中国文学の影響を考えるにあたっては、現在ある辞書や索引類にたよって「原典」との比較にとらわれがちであるが、その間に存在した「類書」との関わりについても、さらに注目されるべきであろう。

主要参考文献

- ・山崎誠『『幼学指南抄』小考』(研究叢書131『中世学問史の基底と展開』所収 一九九三年、和泉書院)
 - ・片山晴賢『『幼学指南抄』攷』(『中村璋八博士古稀記念東洋学論集』所収 一九九六年、汲古書院)
 - ・飯田瑞穂『『秘府略』に関する考察』(飯田瑞穂著作集3『古代史籍の研究 中』所収 二〇〇〇年、吉川弘文館)
 - ・本間洋一『『事類賦』と平安末期邦人編類書』(『和漢比較文学』第三号 一九八六年十一月)
 - ・村上美登志『中世軍記物語と和製類書 『曾我物語』を中心に』(『和漢比較文学叢書第十五巻『軍記と漢文学』』所収 一九九七年、汲古書院)
 - ・村上美登志『『徒然草』と類書』(『国文学 解釈と鑑賞』一九九七年十一月)
 - ・神谷勝広『近世文学と和製類書』(近世文学研究叢書11 一九九九年、若草書房)
 - ・湯橋俊子『日本における中国『類書』の受容』(『國學院大學栃木短期大學紀要』第二十号 一九八五年)
- (なかじま たかな)

人文研の図書掛になって

人文科学研究所 図書掛 赤木俊介

人文科学研究所の図書掛になって一ヶ月余り、日常の業務がどのようなものなのかもまだ十分に把握しておらず、上司や先輩職員にあれこれ質問するだけで多くの時間を費やしてしまう毎日です。

私が大学図書館に就職したいと思うようになったのは、附属図書館でのアルバイトの経験を通じて、大学図書館の仕事に触れることができたからです。一昨年の9月から今年3月までわずか一年半の勤務でしたが、図書の仕事に携わりながら多くのことを学びました。附属でのおもな仕事は、カウンターの端末を使っての貸出、返却処理と返却された本を配架する作業でした。附属は普段から利用者が多いのですが、試験シーズンの前後は特に増え、返却本を満載したブックトラックがずらりとカウンター奥に並ぶこととなります。次々やってくる利用者への対応に追われながら、様子を見て交代で本を書架に返却しにいくという、一般の人が抱く図書館の長閑なイメージとおよそかけ離れた、忙しい仕事だったので当初は驚きと戸惑いの連続でした。このような状況下で仕事を続けていくうちに、効率よく仕事を進めるためにはコミュニケーションとチームワークが必須となるということを実感できるようになりました。社会生活を営むために必要となる対人関係能力を図書館でのアルバイトで身に付けることができたのは私にとって大きな収穫であったと思います。

また、このアルバイトでは、利用者の質問を受け付ける参考調査的な仕事もほんの僅かながら行っていました。しかし、実際には、まともな回答はできず、恥をかきだけで終わることが多かったと記憶しています。そのような体験から、高度な専門知識を修得し、利用者が求める情報を的確に提供できるような図書館職員にな



りたいという思いが芽生え始めたのだと思います。

今の職場である人文科学研究所附属漢字情報研究センターの図書室は、昭和初期に立てられた白壁が美しい、スパニッシュ・ロマネスク様式の建物のなかにあります。多くの人が行き交う本部構内と打って変わって閑静な住宅地に位置し、閲覧者も院生、研究者等に限定されているため閲覧室はいつも静まり返っています。この静けさは研究に相応しい環境です。環境の良さは良質の資料が豊富に揃っている点にもいえます。貴重な漢籍が収蔵されている書庫に初めて足を踏み入れたときは、その広さと蔵書量の多さに圧倒されてしまいました。このような素晴らしい環境のもとで仕事ができることを光栄に思っています。

現在、私が行っている仕事は、おもに中国書の目録作成と他大学への文献複写の依頼です。いずれも初めての仕事なので手取り足取り教えていただかないと仕事にならない状態なのですが、そのなかでも特に難しいと感じているのは書誌の修正です。他大学と情報交換をしながら、コンピューターに入力された書誌と実物とを比較し、書誌を再検討する過程は、面白い作業で

す。しかし、中国書に関するさまざまな知識が要求されるので、この種の書籍に触れる機会があまりなかった私にとっては困難に思われることも多く、日々頭を悩ましています。今後、一

日でも早くこの方面の知識を得て人文研の図書掛の名に恥じないよう、スムーズに仕事がこなせるようになればと考えています。

(あかぎ しゅんすけ)

シネマ・クラシック

淀川長治解説付き 世界クラシック名画の上映

7月4日(木) 14:00 16:45

“映画の父”グリフィスが画期的な映像表現を創造した映画100年史上最大のスペクタクル
題名は人間の心の狭さが生む “不寛容”
同時進行する4つの時代の物語がクライマックスではひとつに結集する画期的なスケールの巨大セットも話題

イントレランス

監督・脚本：D.W.グリフィス
出演：リリアン・ギッシュ他
1916年 アメリカ作品 サイレント

場所：附属図書館3階AVホール

第2～第4木曜日はCDコンサートを開催中です。

気軽にゆったりと聞きに来てください。勉学で疲れた心を癒しに！

東南アジア研究センター図書室

東南アジア研究センター資料部 助手 北村 由美

東南アジア研究センターは、鴨川沿いの川端通りに面して位置し、煉瓦造りの図書室を中心にこじんまりした美しいキャンパスを形作っている。当図書室は、昭和40年（1965）に東南アジア研究センターが官制化すると同時に開設され、昭和61年（1986）に現在の建物に移った。建物はもともと明治20年（1887）に設立された京都織物会社に属し、現在は京都大学歴史的建造物に指定されている。アーチ型の渡り廊下がつなぐ2棟の赤レンガ作りの建物で、ちょっとした観光名所になっているのか、いくつかの京都関係のウェブサイトでも紹介されているのを見かける。また、その古風なつくりとアーチ下の大きな2枚扉が他にないためか、何度かビデオドラマ等にも地方刑務所として「出演」しており、その度に図書室の前には、親分を迎える舎弟や、黒塗りのベンツがつめかけるといふ騒ぎも何回か目にした。

このように、非常に特徴のある外観を持つ図書室であるが、その蔵書内容も多彩である。東南アジアに関する資料を言語形態に関わらず収集するという姿勢で収集された蔵書構成であり、現在12万点以上が登録されている。登録されているうち7割が和漢書以外であり、タイ語、インドネシア語を初めとして東南アジア諸国現地語資料も多い。このような外観、蔵書の特徴は、センター所員にとってはもちろん誇りであるが、その特徴ゆえの悩みの種も多い。まず、建物の面では、高い天井が非常に優美であるが、各種工事は大変難しく業者泣かせである。また冬はいつまでたっても部屋が暖まらない。そして、2棟のうちの1棟の書庫内は、迷路のようなつくりと急な階段で利用者と図書室職員を悩ませている。もちろん蔵書スペースの余裕もかなり

厳しく、渡り廊下にまで並べた書架の重みで床が抜けないか心配しているような状態である。そして、蔵書の登録・検索も大きな問題である。東南アジアの各種言語資料は、タイ語、ビルマ語のように文字そのものが現行のNACSIS - CATでは対応されておらず、かといって言語の性質を考えるとローマ字化入力しても、検索が難しい。利用者環境を整える為の創意工夫が求められている。

これらの諸事情に頭を抱えながらも、当センターでは、東南アジア研究の基盤となるべく資料整備に力をいれ、多言語に付随する問題にも前向きな取り組みを行っている。昨年度は、東南アジア諸国語資料の中で当センターがインドネシア語に並んで現地語資料の中で最も多く所蔵するタイ語をタイ文字のまま入力・検索できるタイ語Web OPACを、客員研究員の協力により構築することができた（<http://library.cseas.kyoto-u.ac.jp/cseas/>）。今後はビルマ語やラオ語等、他の言語にも対応できるシステム作りに取り組むべく検討中である。東南アジアに関する情報収集・発信の拠点となること。それが東南アジア研究センターと図書室の未来に向けた大きな目標である。

（きたむら ゆみ）



教官著作寄贈図書一覧（平成14年3月～4月）

所属等	寄贈者氏名	寄贈図書名	出版社	出版年
名誉教授	上田 皖亮	The chaos avant-garde : memories of the early days of chaos theory	World Scientific	2000
名誉教授	上田 皖亮	カオスはこうして発見された	共立出版株式会社	2002
名誉教授	石橋 武彦	家畜の生態機構	文永堂出版	2000
総人教授	福井 勝義	水の原風景	TOTO出版	1996
総人教授	福井 勝義	牧畜文化の原像	日本放送出版協会	1987
総人教授	福井 勝義	世界民族言語地図	東洋書林	2001
総人教授	岡田 温司	ルネサンスの美人論	人文書院	1997
総人教授	岡田 温司	女性の良き作法について (ルネサンスの女性論1)	ありな書房	2000
総人教授	岡田 温司	女性の美しさについて (ルネサンスの女性論2)	ありな書房	2000
総人教授	岡田 温司	女性の美と徳について (ルネサンスの女性論3)	ありな書房	2000
総人教授	岡田 温司	絵画の自意識	ありな書房	2001
総人教授	岡田 温司	視覚と近代	名古屋大学出版会	1999
人文研教授	井狩 弥介	ヤージュニャヴァルキヤ法典	平凡社	2002
法学研究科 助教授	毛利 透	民主政の規範理論	勁草書房	2002
工学研究科 教授	松井 三郎	今なぜ地球環境なのか	コロナ社	2002
工学研究科 教授	松井 三郎	環境毒性削減:評価と制御	環境技術研究協会	1996
工学研究科 教授	松井 三郎	ILEC/UNEP 湖沼環境管理のためのガイドライン 第4巻	(財)国際湖沼環境委員会(ILEC)	2001
工学研究科 教授	松井 三郎	Guidelines of Lake Management Vol.4	International Lake Environment Committee Foundation	1991
工学研究科 教授	松井 三郎	Guidelines of Lake Management Vol.8	International Lake Environment Committee Foundation	1997
工学研究科 教授	松井 三郎	Environmental Pollution Control	The United Nations University	1993
工学研究科 教授	松井 三郎	Monograph Series 13 Industrial Pollution Control in Japan	APO	1992
工学研究科 教授	松井 三郎	Asian Approach to Resource Conservation and Environment Protection	APO	2000
文学研究科 教授	苧阪 直行	意識の科学は可能か	新曜社	2002
地球環境学 教授	植田 和弘	環境学序説 1	岩波書店	2002
教育学部 教授	東山 紘久	「プロカウンセラーの聞く技術」の韓国語訳版	模索図書出版	2001
高等教育 講師	溝上 慎一	大学授業研究の構想	東信堂	2002
霊長研 教授	松沢 哲郎	進化の隣人チンパンジー(NHK人間講座)	日本放送出版協会	2002
名誉教授	渡辺 弘之	熱帯林の保全と非木材林産物	京都大学学術出版会	2002
人文研 助教授	田中 雅一	植民地主義と人類学	関西学院大学出版会	2002

蔵書統計（平成14年3月31日現在）

部 局	受入冊数			蔵書冊数			入力冊数		
	和 書	洋 書	計	和 書	洋 書	計	和 書	洋 書	計
附属図書館	9,813	1,878	11,691	570,882	274,835	845,717	287,312	71,260	358,572
附属図書館宇治分館	89	397	486	25,009	80,726	105,735	8,559	25,120	33,679
総合人間学部	4,391	1,544	5,935	320,601	272,919	593,520	99,227	73,255	172,482
文学部	11,168	8,365	19,533	521,006	352,497	873,503	63,281	103,334	166,615
教育学部	1,846	1,111	2,957	80,296	59,880	140,176	30,262	18,780	49,042
高等教育教授システム開発センター	561	88	649	1,803	854	2,657	0	0	0
法学部	3,833	5,398	9,231	253,278	346,378	599,656	48,474	64,663	113,137
経済学部	4,353	3,009	7,362	234,259	222,863	457,122	58,598	53,674	112,272
理学部	626	1,160	1,786	48,250	201,592	249,842	19,561	61,608	81,169
医学部	589	1,980	2,569	50,902	140,984	191,886	7,163	3,843	11,006
薬学部	119	520	639	12,160	33,863	46,023	3,339	2,801	6,140
工学部	1,076	1,900	2,976	130,100	207,888	337,988	52,362	35,962	88,324
エネルギー科学研究科	87	85	172	3,072	2,608	5,680	1,581	1,042	2,623
情報学研究科	533	942	1,475	12,213	55,001	67,214	7,269	19,972	27,241
農学部	1,065	877	1,942	172,283	154,508	326,791	18,507	8,463	26,970
農学部附属農場	0	0	0	586	113	699	6	32	38
農学部演習林	106	124	230	10,019	3,561	13,580	2,622	870	3,492
人文科学研究所	4,966	1,055	6,021	442,590	74,490	517,080	31,843	18,312	50,155
再生医科学研究所	0	0	0	1,825	5,639	7,464	161	265	426
ウイルス研究所	0	0	0	484	10,077	10,561	113	1,202	1,315
基礎物理学研究所	152	1,486	1,638	8,255	68,455	76,710	4,547	31,246	35,793
経済研究所	80	156	236	40,527	33,670	74,197	5,490	13,214	18,704
原子炉実験所	70	448	518	12,493	33,546	46,039	2,965	4,663	7,628
数理解析研究所	16	821	837	6,477	70,510	76,987	4,186	32,537	36,723
霊長類研究所	173	474	647	6,467	13,972	20,439	4,703	4,381	9,084
東南アジア研究センター	723	17,655	18,378	23,422	97,621	121,043	15,760	45,674	61,434
大型計算機センター	269	193	462	5,303	11,828	17,131	4,734	7,396	12,130
総合情報メディアセンター	0	0	0	226	552	778	3	163	166
環境保全センター	1	50	51	618	1,161	1,779	250	1,139	1,389
放射線生物研究センター	0	0	0	405	1,816	2,221	213	116	329
医療技術短期大学部	254	58	312	24,614	5,747	30,361	5,246	1,422	6,668
生態学研究センター	185	320	505	2,224	4,967	7,191	852	1,476	2,328
人間・環境学研究科	283	310	593	5,319	11,402	16,721	4,506	9,363	13,869
アジア・アフリカ地域研究研究科	532	11,322	11,854	9,864	62,589	72,453	6,936	50,767	57,703
そ の 他	0	0	0	1,448	139	1,587	0	0	0
合 計	47,959	63,726	111,685	3,039,280	2,919,251	5,958,531	800,631	768,015	1,568,646

人事異動

平成14年3月31日付

辞職

附属図書館情報サ - ビス課専門員	吉井 紀子
農学部整理掛長	中司 里美

定年退職

文学部整理掛	橋本 展世
法学部整理掛	高橋實智子
法学部閲覧掛	堀田 倫子
"	山本 絹栄
経済学部整理掛	篠原 恵子
理学部数学教室図書室	阪口 昭子
工学部図書掛地球系図書室	都解富美子
農学部学術情報掛	斉藤 修二
人文科学研究所図書掛	中西 幸子
数理解析研究所図書掛	渡辺 脩子
大型計算機センタ - 図書室	山本 裕子

平成14年4月1日付

転出

広島大学附属図書館事務部長へ昇任	由良 信道(附属図書館総務課長)
愛媛大学附属図書館情報サ - ビス課長へ昇任	山田 周治(附属図書館受入掛長)
奈良女子大学附属図書館専門員へ昇任	木村 祥子(附属図書館特殊目録掛長)
京都教育大学附属図書館情報管理係長へ昇任	蒲 彰子(基礎物理学研究所会計掛図書室)
京都教育大学附属図書館情報サ - ビス係長へ昇任	川村 順子(法学部整理掛)
国際日本文化研究センタ - 情報管理施設	
" 文献資料係長へ昇任	小泉 淳子(工学部図書掛物理工学系図書室)
" 資料利用掛	西村 暁子(工学部図書掛)
滋賀医科大学附属図書館情報管理係長へ昇任	美濃部朋子(人文科学研究所図書掛)
" 総務掛	清嶋 愛(工学部図書掛情報学研究科図書室)
国立国会図書館関西館	濱口 敦子(附属図書館電子情報掛)

大学内異動

附属図書館総務課長	小花 洋一	法学部整理掛	筑木 一郎
総務課経理掛	岩田 匡代	" 閲覧掛	岡本小由里
" 庶務掛長	小西 久子	経済学部整理掛	楠見 牧子
情報管理課受入掛長	川崎 雅史	" 閲覧掛長	原 裕之
" 電子情報掛	江上 敏哲	医学部閲覧掛長	島 文子
" 特殊目録掛長	為石理恵子	工学部図書掛	土山 賀子
情報サ - ビス課専門員	慈道佐代子	" (エネルギー・科学研究科)	吉田 弘子
" 参考調査掛長	辻井喜美代	" (情報学研究科)	中塚 弘人
" 資料運用掛長	廣部 繁子	農学部整理掛長	田中 耕二
" 雑・特殊掛長	綾部 房子	人文科学研究所図書掛	木村 和子
総合人間学部整理掛長	織田 陽	"	赤木 俊介
" 閲覧掛長	岡野 拓也	経済研究所図書掛	井上 玲子
文学部整理掛	高城 雅恵	基礎物理学研究所図書室	由本 慶子
文学部閲覧掛長	松田 博	数理解析研究所図書掛	秋本 好治
法学部整理掛	岡澤 暢子	"	堀部 文子

うれしいお知らせ

NACSIS-IRを学内から自由に利用できます

情報サ - ビス課 参考調査掛

平成14年4月から、NACSIS-IR（国立情報学研究所情報検索サービス）の利用が、機関別定額制になります（但し一部商用データベースを除く）。利用料金は、附属図書館で一括して支払います。

したがって、

- ・学内から利用料金を気にしないで、自由にアクセスできます。
- ・個人の利用申請は、不要です。
- ・学内構成員（教職員、院生、学部学生などすべての方）は、利用できます。

利用可能なデータベース等は、国立情報学研究所（NII）のホームページを参照してください。

（URLは、<http://www.nii.ac.jp/service/teigaku/dblist.html>）

附属図書館の情報端末室を増設

情報サ - ビス課

このたび、附属図書館では、インタ - ネット利用者が急増している現状に即応し、また利用者へのサ - ビス拡充のため、4月15日から新たに30台のパソコンを設置した情報端末室をオープンしました。すでに利用されているパソコン50台とあわせて、合計80台のパソコンが利用できるようになりました。

連日多くの利用者で待ち行列ができるほどで、利用者にはなかなか好評です。



附属図書館新入生歓迎オリエンテーションを実施

情報サービス課 参考調査掛

平成14年4月8日（月）から12日（金）まで、新入生歓迎オリエンテーションを実施、合計539人が参加しました。附属図書館3階AVホールで12時15分からの30分間、資料の探し方・借り方、館内施設案内、カード目録の見方などをスクリーンで見てもらいながら説明しました。参加者からは、図書館の使い方がわかってよかった、等の感想が寄せられました。



OPAC基礎講座の実施について

情報サービス課 参考調査掛

図書や雑誌の基本的な探し方を、OPACの簡単な解説、端末操作、演習問題によりマスターする講座です。附属図書館1階サイバースペースでおこなっています。予約は不要です。日程は附属図書館ホームページをごらんください。

